連載 ◇ リレーエッセイ　私が出会った大阪文学学校 ⑯

愛しさを込めて

夏当紀子

大阪文学学校との関わりを振り返るのは、少々戸惑いがある。自分の半生も覗かなければならない。できたら小説以外は、死ぬまで今と前を向いていたい。しかし、重い扉を開けることにする。

学校は出会いと別れの場でもあるが、こんなに永別の多いところは経験したことがなかった。急な悲報は一瞬も慣れることがない。二度と会うことができないという理不尽な壁の向こうに逝ってしまったお一人お一人が心に刻まれて、一人一人に私の悔いがある。今年七月十日に事務局メンバーを務めていた佐々木鈴さんが亡くなられた。その三日前に話した体温が残っている気がする。しばらく誰もいない事務局窓際の風景から目をそらせた。二二年十二月にはチューターだった山田兼士さんが、二月には銻雅代さんが、二一年二月には高畠寛さんが亡くなられた。私自身が通信教育部の生徒としてお世話になった尊敬するチューターの多くの方ともお別れした。松原真理子さん、北川荘平さん、小島輝正さん、高村三郎さん、竹内和夫さん……。自分がチューターになってからは、学生さんの逝去にも何度も向き合わなければならなかった。佐々木鈴さんもそのお一人であった。今はただ深く頭を垂れることしかできない。

結婚するときの条件の一つが、「私は小説を書きたい」ということだった。珍しくもないかもしれないが、私の育った家は文化芸術や、その集まりなどには内容にかかわらず厳しい制限が掛かった。それでも学生時代は、学生運動の中、迷路を彷徨っていたのだけれど。要するに結婚によって、私が「書くこと」への一番の理解者を得た。

職場の産休や育休の間に、大阪文学学校の通信教育部に入学した。だが、その作品集に掲載されても自分や子どもの体調でやむなくスクーリングを欠席、嘆息の一日だったことも度々で、担任だった北川荘平さんとは生徒としては会うことができなかった。復職したら書けなかったので、文校には出たり入ったり、でも一筋の光のように諦めることはなかった。その頃は一クラスだけだったのか、自分でチューターを選ぶことなどなく次へ進み、やっとスクーリングに出席したら小島輝正さんとマンツーマン、ということもあった。いつも遠くから拝見拝聴しているだけだったのが、まるで緊張して話

の内容も覚えていない。せっかくの機会なのにもっと質問したり貪欲に吸収するべきだったと後々になって自分の逃げ癖を悔やんだ。奥野忠昭さんや日野範之さんには担任してもらうことはなかったが合同スクーリングでの話が魅力的で憧れて聞いていた。

初めて書いて提出した作品が捕虜虐待の話だった。戦争体験もない二十代の女性が突然書いたものがそれだったのでびっくりしたと、後に担当チューターだった竹内和夫さんに言われた。振り返ると、情報も取材もない恥ずかしいばかりの駄作だが、今でも自分を動かしたエネルギーだけは分かる。弱いものへの無理解、不当な圧力、戦争という不条理……。「怒り」はいつも私の中にあった。

通教部の戻ってくるチューターの添削でも、スクーリングでも、自分の作品のようなものを、こんなに丁寧に扱い、読んでくれて評されることに身体が震えるほどの感動を覚えたのを今も思い出す。こんな場所はどこにもないと思えた。小説を書きたい私を受け入れ、拙い作品を認めてくれる。そんな経験は私が育ってきた暴力的な家庭環境にはなかったものだった。後に受け持った本科クラスの人から「こんな天国のような場所があったなんて知らなかった」と言われたことがある。かつての若い私と同じ感動だった。昼間部で、毎週共に作品と作者を受け入れるメンバーがいることは私以上の天国なのかもしれない。

通信教育部卒業生で生まれた同人誌『飢餓祭』の創刊に呼ばれて三十年以上が経つ。以来ずっとそこは私の作品発表の場であり続けている。文学学校を辞めるのは不本意だったが、仕事を退職し親の介護と子育てに追われる主婦の財布はいつも苦しかった。

竹内さんがチューターを退くとき、交替に夏当を推薦しようかと訊かれたが、とうてい竹内さんのような偉大なチューターの真似事もできる自信はなく、固辞した。がその六年後、平野千景さんのお世話で小説昼間部のチューターになった。開講式の時、奥野さんから「チューターになったら書けなくなるよ」と言われた。それは決して呪いの言葉ではなく温かいアドバイスだったが、毎週夢中で学生さんの作品と合評に向かっていると、その言葉通り私は書かない人間になっていた。「書けない」などと偉そうに言うのはおこがましい。書かなくとも充実した時間を毎日過ごすことができたのだ。尊敬する先輩の佐久間慶子さんにいつも多くのことを教えてもらった。ある日、「夏当さん、書かないといけないよ、絶対に作品を書きなさい」とハッパをかけられて、はっとした。背中を叩かれた気がした。奥野さんの言葉も裏には「書きなさい」という意味があった。作品を書くことでクラスの方々とも向き合うべきだろう。表現することを捨ててはいけない。それからは毎号の「飢餓祭」に作品発表することを自分に課した。

あんまり数えないのだけど、チューターになって十五年になる。たくさんの作品と作者に出会ってきた。クラスのメンバーは皆勤の人も少なくない熱心さで、いつも賑やかだ。それぞれの時間、体験を生きてきた人が個別に集まってくる。

戦争を知る人、知らない人、現役も、退職者も、パートナーがいる人、いない人。それぞれに描かれる世界、表現方法は個別で価値がある。作品を読み書き話すことで少しずつほどけて溶けていくものを感じる。私は、チューターなどという前に、クラスのみなさんから学ばせてもらうことが実に多かった。

それで金儲けはできるのか、と訊かれることがある。学生さんが言われることもあるし、他の場面でも。「文学学校とは何ですか」と訊ねられるのと同様に、私は上手く即答ができない。報酬が得られるのはうれしいし、作品が評価されて有名になるのも応援したい。が一方に文学賞に応募もしないけれど、ものすごい名作が文学学校にあることをどのチューターも知っている。小原政幸事務局長が先日、『文芸思潮』に『樹林』を紹介して書いた最後に、小島輝正さんの一文を載せている。「大阪文学学校に属すべき栄光があるとすれば、それは、多くの無名の書き手たちを絶えず種子のごとく蒔き続けて、鬱勃たる文学的植林を遂行したことにある。」この表現者の渦の片隅に自分もまた人生の重要部分を関わらせてもらえたのはほんとうに有難いことだと思える。多くの人の支えがあったことを今、改めて思い知る。

大阪文学学校は来年創立七十年を迎える。この国が戦争に負けてから少なくとも戦争をしない平和な年月の間と重なる。だが、世界の紛争はすぐ身近にあり、独裁者（組織）は市民から自由を奪う。表現にも創作にも圧力をかける。いま、ここでもひたひたと不穏な危機感を抱くのは私だけの単なる杞憂だろうか。

大阪文学学校の存在に切なさと深い愛しさをもつ。切なさは私の個人的感慨としても、愛しさは多くの人に共通する思いだろう。文校の明日は私の希望だし、大阪の希望であり、人間の希望だと、愛しさを込めて強く思う。